NPO 法人 愛知カウンセリング協会　未来への新たな一歩を話し合う会　　2023．10．22

これからのカウンセリング

末武 康弘（法政大学）

はじめに

法政大学の末武です。よろしくお願いいたします。本日は NPO 法人愛知カウンセリング協会の臨時総会および「未来への新たな一歩を話し合う会」に参加させていただき、また、このような話題提供の機会を与えていただいたことに、心より感謝申し上げます。

長い活動の歴史を有しておられるこちらの協会には、著名な指導者・世話人の先生方や、その先生方とともに長年にわたってカウンセリングの学習や実践を積み重ねてこられた多くの方々がおられますので、私を話題提供者としてご指名いただいたことについては、少々面映ゆいような、それ以上に戸惑いを感じるような思いもしております。にもかかわらず、今日の話題提供をお引き受けしましたのは、おそらく、少し離れた立ち位置から東京や全国の状況などもあわせて、カウンセリングのこれまでとこれからについて話してほしいという、理事長の稲葉先生はじめ関係者の皆様のお気持ちがあってのことなのではないか、と私なりに拝察し、それに多少なりともお応えできればと思ったからです。

とは言いましても、どれくらい皆様のお気持ちに沿う話題提供ができるかはわかりませんが、50 分ほどの時間、お付き合いいただければ幸いです。

私と愛知カウンセリング協会との関係

私と愛知カウンセリング協会との関係は、直接には、平成 22 年（2010 年）度の夏期ワークショップの世話人として呼んでいただいたことから始まります。そのときのお声がけは、故・髙橋幸夫先生のお嬢様、故・美由貴先生からいただきました。美由貴先生とはその 1～2 年前に、当時の財団法人日本カウンセリング・センターでの世話人研修会にご一緒したご縁で、知己を得ることになりました。そのとき、私は美由貴先生とは全くの初対面だったのですが、美由貴先生のお父様が髙橋幸夫先生であることを知り、初対面とは思えないご縁を感じました。

と言いますのも、平成 11 年（1999 年）に開かれた日本カウンセリング・センターの法人設立 40 周年を祝うレセプション会場で、「私は友田不二男に殺されました！」と大きな声でスピーチをされた男性がおられたのです。それが髙橋幸夫先生でした。言葉だけを聞くと何とも物騒な表現ですが、一般的な意味合いでは「友田不二男に雷を落とされた！」ということだったのかもしれませんし、もう少し深い次元では「友田不二男のおかげで、自分のそれまでのあり方を全面的に見直さざるを得ない体験をした！」ということだったのかもしれません。「私は友田不二男に殺されました！」という言葉に込められた髙橋先生の真意に

ついては、そのときにもその後も確かめることはしていないのですが、私は会場でその言葉を聞いたときに「私もそうだ！」と反応したことを今も鮮明に記憶しています。そしておそらく、そのような反応をしたのは私だけではなかったと思っていますし、実際に、「私もそうだ！」という声が会場のあちらこちらから聞こえました。

これは今から 20 数年ほど前のエピソードですが、カウンセリングを学ぶことや実践することは、自分の人としてのあり方全体を問われるとても厳しいものであった、という当時の雰囲気の一端を示すものだと言って差し支えないでしょう。友田先生は、そのようなカウンセリングの厳しい学びや実践の道を切り拓いた先駆者でした。そして髙橋先生は、その厳しい道のりを逞しく歩み続けられた先達のお一人だったと私は受けとめています。

その後私は、平成 20 年（2008 年）度より日本カウンセリング・センターの理事になり、同センターの評議員を務めておられた髙橋先生とは折に触れて会合等でお話しする機会を得るようになりました。そのような経緯から、こちらの夏期ワークショップについて美由貴先生からお声かけいただいたときに、言葉にできないような深いご縁を感じ、世話人をお引き受けすることにしました。

そして実際に愛知カウンセリング協会の夏期ワークショップに参加してみますと、当時理事長を務めておられた吉野先生や、現理事長の稲葉先生、副理事長の江口先生、そして渡辺先生、水野先生、杉本先生、蓑田先生、大島先生、柴野先生はじめ多くの先生方が、髙橋先生と協働してカウンセリングの厳しくも豊かな道のりを歩んでいらっしゃることを実感することができました。その結果、私も今夏の最後のワークショップまで世話人としてご一緒させていただいた次第です。また、法政大学で博士の学位を取得し、その後皇學館大学の専任教員となった私の共同研究者の一人、髙沢佳司さんも数年前より世話人に加えていただきました。さらには、平成 24 年（2012 年）より今夏まで、数多くの法政大学の学生たちを夏期ワークショップに参加させていただきました。これまでさまざまなお心遣いをくださった先生方のご厚意に、心より感謝申し上げます。

カウンセリングのこれまで

話題は少し変わりますが、カウンセリングのこれまでについて考えてみたいと思います。

先ほど名前が出ました財団法人日本カウンセリング・センターは、法令の改正に伴い、平成 26 年（2014 年）度からは一般財団法人日本カウンセリング・センターとなり、平成 28 年（2016 年）度より私が最後の代表理事を務めました。その日本カウンセリング・センターも、諸般の事情より、一昨年（令和 3 年、2021 年）の秋に解散し、その 62 年に及ぶ歴史の幕を閉じましたが、今から 4 年前の令和元年（2019 年）の夏に法人設立 60 周年の記念事業を執りおこないました。その際に私は、「公認心理師時代の今、あらためてブライアンズ・ヴァキュームに学ぶ」と題した講演において、日本のカウンセリングの歴史について次のような整理をおこなってみました。

第一ステージは「黎明期」（1950 年代～70 年代）です。第二次世界大戦後、ロジャーズの来談者中心療法を主軸として、カウンセリングの学習会やワークショップが開かれるようになりました。その先駆は、昭和 30 年（1955 年）に友田氏とローガン・ファックス氏によって茨城県日立市で開催された「カウンセリング研究討論会」です。その後、こうした活動は全国各地に波及し、次第に「カウンセリング」という言葉が日本でも市民権を得るようになりました。日本カウンセリング・センターを皮切りに、各地にカウンセリングの実践や研修のための団体が設立され、それらを統括する全日本カウンセリング関係団体連絡協議会（現・全日本カウンセリング協議会）が昭和 43 年（1968 年）に設置され、カウンセラーの資格制度が誕生することにもなりました。

第二ステージは「繚乱期」（1980 年代～2000 年代）と言えます。来談者中心療法に加えて、フロイトを源流とする精神分析、ユングの深層心理学、行動療法や認知行動療法、システム論的な家族療法、等々、さまざまなカウンセリングや心理療法の理論と方法の理解や実践が広まるようになりました。1988 年に臨床心理士の資格認定が始まり、1990 年代から 2000 年代には臨床心理士を養成する指定大学院が全国に整備されていきました。臨床心理士以外でも、各学会等がカウンセリングや心理学に関係する専門資格を認定するようになりました。カウンセリングの学習や研修・研究の場は次第に、民間の団体から大学・大学院や学会等へと移っていきました。

そして現在の第三ステージは「揃刈（せんがい）期」（2010 年代～現在）とでも呼べるのではないでしょうか。2017 年 9 月に施行された公認心理師法により、2018 年度から公認心理師の国家試験がおこなわれるようになり、カウンセリングに携わる多くの人々の悲願でもあった国家資格化が実現することになりました。しかし、そのことはある意味で、百花繚乱・玉石混交のカウンセリングや心理学の資格を国がもはや野放しにはせずに、公的な基準と試験制度によって一定のお墨付きを与える、ということになりました。つまり、現在進行中のこの第三ステージは、さまざまに咲き乱れているカウンセリングのアプローチや資格を国の基準によって刈り揃え、均質化しようとする方向で進められている、とも言えます。

そうした中で私が危惧を覚えたのは、公認心理師のカリキュラムを検討する国の委員会が、カウンセリングや心理療法などを教える科目名称を「心理支援」ないし「心理学的支援法」とし、その内容として「1. 力動論に基づく心理療法の理論と方法、2. 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法、3. その他の心理療法の理論と方法、…」（厚生労働省「公認心理師カリキュラム等検討会報告書」）と記載したことでした。これでは、精神分析と認知行動療法以外のカウンセリングや心理療法は、「その他」のカテゴリーの中に放り込まれてしまいます。まさか、これまで日本のカウンセリングの最も大きな支柱であった来談者中心療法が国によって刈り取られてしまうのでは？ これが私の杞憂に過ぎないのであればよいのですが・・・。また、公認心理師の養成も臨床心理士と同じく、あるいはそれ以上に大学・大学院をはじめとした公的機関を中心に行われますので、民間団体が果たす役割にはますます大きな変化が求められるようになっています。

日本のカウンセリングのこれまでの動向について、私なりに大括りに整理すると、とりあえず以上のようになります。そしてこれを、今般こちらの協会で編集・刊行された『愛知カウンセリング協会 60 年の歩み～こころを聴く～愛知カウンセリング協会が遺したもの』に稲葉先生と江口先生が執筆された、第 I 部「愛知カウンセリング協会のあゆみ」（以下、「協会の歩み」）の内容と照らし合わせてみたいと思います。

愛知カウンセリング協会の発足は昭和 38 年（1963 年）とのことですので、ちょうど今年で設立 60 周年、いわゆる還暦を迎えられたということになるでしょうか。先ほどの私の整理と同じく、「協会のあゆみ」でもこの発足の時期は「黎明期」と名づけられています。私の整理と異なるのは、「協会のあゆみ」ではその後が「興隆期」と名づけられて、昭和 40 年代、昭和 50・60 年代と分けて記載されている点です。昭和 40 年代が 1965 年～1974 年、昭和 50・60 年代が 1975 年～1988 年ですので、「興隆期」の前半（昭和 40 年代）は私の言う「黎明期」の後半に、また「興隆期」の後半（昭和 50・60 年代）は私の言う「黎明期」から「繚乱期」へと移り変わる時期から「繚乱期」の前半におよそ当てはまると言ってもよいのではないでしょうか。

そしてそこから読み取れるのは、一つには、愛知カウンセリング協会や愛知県の（特に教育界における）関係者には、おそらく、全国でもかなり早い時期からカウンセリングへ関心を寄せた方々が数多くおられて、熱心に学習や実践に取り組んでいらっしゃったのではないか、ということです。そうした中で、「興隆期」と呼べるような動向が愛知の地でいち早く生じたのでしょう。また、もう一つ読み取れるのは、私が「繚乱期」と名づけた時期には、全国的には、カウンセリングの理論や流派間の対立や勢力争いなどが生じることになった団体が少なくなかったのですが、愛知カウンセリング協会には、ロジャーズの来談者中心療法をベースに据えながら、それ以外のカウンセリングの理論や流派を拒絶することなく受け入れる、というオープンで許容的な雰囲気があったに違いない、という点です。全国各地のカウンセリング関係団体の中には、来談者中心療法と相反する考えや方法を頑なに拒否するところもあれば、逆に来談者中心療法の看板を降ろして別のものに書き換えたところもありました。そうした中で、来談者中心療法と他の理論や流派の相互理解や共存を可能ならしめた愛知カウンセリング協会の活動や運営は特筆に値すると思います。

そしてこうした特質によって、「協会のあゆみ」に記されているその後の発展や NPO 法人化、独自の資格認定制度なども可能になったのではないかと私は推察しています。

ただ、「協会のあゆみ」の「発展・停滞期」の記述を読ませていただくと、これは愛知県だけではなく全国的な動向だったと思いますが、臨床心理士の資格制度やスクールカウンセラーの配置、また、それらを養成する指定大学院の整備といった、平成に入る頃から顕著になった大学・大学院を中心とするカウンセラー養成の動向が、愛知カウンセリング協会のような民間団体の活動にとってかなり強い逆風になったという事実にあらためて気づかされます。これらが愛知カウンセリング協会の解散にも結びついた、大きな要因になったのではないでしょうか。またこうした動向は、国家資格・公認心理師の誕生によって、今後ます

ます強まっていくのではないかと予測されます。こうしたことを私たちはどう受けとめ、カウンセリングのこれからについてどのように考えればよいのでしょうか？

私は専任教員として大学および大学院に身を置いていますので、臨床心理士養成や、現在ではあわせて公認心理師の養成の当事者でもあり、これらの資格制度を軽々に批判できる立場にはないのですが、それでも、大学や大学院のみで熟練したカウンセラーの養成が可能だろうか？ また、カウンセリングの研修や研究は学会等でおこなえば十分だろうか？ といった疑問は湧いてきますし、こうした問いについて深く考えざるを得ません。

もちろん、大学や大学院での教育、また学会等での研修や研究は重要なものだと思いますし、公的な資格制度によってカウンセラーの資質や技能の水準を担保することも必要なことだと考えています。しかし、その一方で私は、地域コミュニティに存在するNPOなどの民間機関において、さまざまな世代や多様な社会的・職業的な背景をもつ人々が出会い、学び合うことができるような場がないと、カウンセリングを深く学び続けることはできないのではないかとも強く感じています。当然、臨床心理士や公認心理師の資格を取得した若い世代の人たちにとっても、そのような場はとても有益であり、今後とも必須のものであると言えるでしょう。こうした点からも、この度のNPO法人愛知カウンセリング協会の解散は本当に残念ですし、心寂しい思いをされている方々は大勢いらっしゃることと思います。

いわゆる「三変」について

ところで、先ほどから何度か名前が出てきています友田不二男氏は、いわゆる「三変」、すなわち、偉人の生涯に見られる三度の生まれ変わりについて、折に触れて語っておられたようです。

例えば、芭蕉三変は『冬の日』、『猿蓑』、『炭俵』とのこと。どういうことか言いますと、松尾芭蕉は、俳諧集の大きな質的変化によって、まさに俳聖へと生まれ変わっていった、と友田先生はおっしゃっていたそうです。私は俳諧については素人ですので、確たることを申し上げることはできませんが、おそらく、芭蕉は『冬の日』によって、それまでの貞門俳諧の「物付け」（言葉の掛け合い）や、談林俳諧の「心付け」（意味の展開による付け合い）に対して、「匂付け」（余情、余韻を汲んだ付け合い）による新風、すなわち蕉風俳諧を打ち立て、その後『猿蓑』では景情融合の円熟した詩的世界を、そして『炭俵』では「ほそみ・かるみ」の枯淡の境地を切り拓いた、ということかと思われます。

また友田先生は、ロジャーズについては「非指示」、「来談者中心」、「エンカウンター」と三変していったのではないかとも、また、ご自身については、友田三変を「ロジャーズ」、「真空」、「易経」と述べておられたようです。

このような見方からすると、例えばジェンドリンについては、「体験過程」、「フォーカシング」、「暗在性の哲学」などと、その「三変」を言い表すことができそうですし、ユングにもそのような「三変」があったのではないかと言えるように思います。（ユングに「三変」

があったかどうかについては江口先生にどこかでご教示いただければ幸いです。）

また友田先生によれば、偉人は一変において世間にその名を知られ、二変においてその名声をゆるぎないものとし、さらに三変において他の追随を許さない独自の境地へと進んでいくのだそうです。

先ほど私は、日本のカウンセリングについて「黎明期」、「繚乱期」、「揃刈期」という三つの段階によって整理しました。これはいわば、これまで日本のカウンセリングが歩んできた「三変」と言えるかもしれません。これはこれで、日本のカウンセリングが進歩してきた姿だと言うことができるでしょう。しかし、どこか釈然としないのは、日本のカウンセリングがこの「三変」で完成したのだろうか？ これで終わりなのだろうか？ という疑問が残るからです。

偉人の生涯と、カウンセリングの展開といった社会的な動向を類比させて論じることに無理があるのかもしれませんが、しかしそうだとしても、芭蕉の『炭俵』の世界、すなわち現代にも生き続ける俳諧の精神の神髄や、ロジャーズが「エンカウンターグループ」のアプローチをさまざまな社会改革に具現化しようとした、その「静かなる革命」のスピリット、またジェンドリンが晩年に『プロセスモデル』によって「暗在性の哲学」を展開し、TAE（thinking at the edge：辺縁で思考すること）という理論構築法を提案したおそるべき創造性といったことに想いを馳せるとき、日本のカウンセリングの最終的な段階なり境地が「揃刈期」などであるとはとても思えません。これで終わりでは決してないはずです。

カウンセリングのこれから

よくよく考えてみますと、「三変」という見方は、偉人の生涯や物事の移り変わりにおける質的な変化なり飛躍をとらえるとてもユニークな視点ですが、必ずしも「三」という数字にとらわれる必要はないのかもしれません。

『老子』には、「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」とあります。この『老子』の説くところからしますと、「三変」という見方において「三」が意味を持つのは、「三」ですべてが完結するからではなく、むしろ「三」から万物が生じ、そこから世界が進展する、ととらえることができるからでしょう。ということは、「三」の先には、果てしないその続きの世界が開かれている、と考えることができます。

そう考えると、ジェンドリンが『プロセスモデル』の最後に、「この哲学は継続する哲学である」と書いていることは、とても重要な示唆を私たちに与えてくれますし、ロジャーズの「静かなる革命」は、世界各地で戦争が繰り返され、他国との間に、また自国の中でも人々の深刻な分断が生まれている現代の状況においてこそ顧みられ、実践される価値を持つものであると言えると思います。

すなわち、ロジャーズやジェンドリンの思想やアプローチは（そしてユングの思索や方法も）、決して終わったわけではなく、公認心理師の国家資格化の時代の中で刈り取られてし

まうものでもありません。カウンセリングはこれからも社会の中で発展し、「揃刈期」の後にまた新たな段階を迎えることになるはずです。それがどのようなものになるのか、その具体的な姿は私にもわかりませんが、いくつかの重要な発展の方向性は指摘できるのではないでしょうか。

以下は、あくまでも私個人が現時点において考えています、カウンセリングの今後の方向性に関する覚え書きです。

・専門性と大衆性：カウンセリングは公的な資格をもつ専門家のみが行なうものか、資格や学位などにかかわらず、多くの人々が活用することができるものなのか、という議論は以前からありました。ロジャーズは 1946～47 年にアメリカ心理学会の会長を務めており、その頃に米国の臨床心理士資格がアメリカ心理学会を中心に整備されましたので、サイコセラピーを医師のみならず心理士にも拡大した中心人物の一人だと評されることもあります。確かにロジャーズにはそのような一面もありますが、それ以上に、彼はカウンセリングやサイコセラピーが、医師であれ心理士であれ一部の専門家の専有物になってしまうことに強く異議を唱えていました。カウンセリングは万人のものである、というのがロジャーズの核心的な考えです。このロジャーズから継承すべきスピリットは、今後もカウンセリングの世界の中で失ってはならないものだと私は考えます。実証的研究によるエビデンスは、医師や心理士といった専門資格の有無やその種類がカウンセリングやサイコセラピーの効果に差をもたらすのではなく、熟練した経験や協働的な関係構築の力などの方が効果とより強い関係にあることを示しています。

一方で、カウンセリングを提供する側の専門性をより高め、大学・大学院などの公的機関でカウンセラーを養成し、学会等でその研修や研究の機会を提供するという現在の主要な動向も否定されるべきものではないでしょう。カウンセリングの社会的な定着や信用などにとっても専門性の担保は重要なことだと言えます。

そこで大切なのは、専門性と大衆性の両立なのではないでしょうか。より多くの人たちがカウンセリングを学び、家庭や地域コミュニティの中でそれを活用できるようになれば、カウンセリングの裾野は広がります。その裾野の広がりは、資格や専門性を持つ人たちのプロフェッショナルな実践を、より底上げする原動力になるのではないでしょうか。そのためには、カウンセリングの実践の場においても、また学習や研修の場においても、さまざまな背景や経験、経歴を持つ人たちが交流し、学び合い、実践においても協力できるような機関や場が今後とも必要になると思います。

・一元的志向と多元的志向：次に、一つの理論なりアプローチを大切にしようとする一元的な志向と、さまざまな理論や方法を取り入れていこうとする多元的な志向との関係について考えてみたいと思います。日本のカウンセリングの動向は、まずロジャーズの来談者中心療法を主軸として始まりました。その後、その他のさまざまな理論や方法が受容され展開さ

れるようになりました。そのような動向を私は「黎明期」とそれに続く「繚乱期」と呼びました。そして、おそらく現在の「揃刈期」の後に訪れるその次の動向を考えるためには、「黎明期」や「繚乱期」が遺したものに立ち返り、それらをどのように次の時代に活かしていくのか、ということが一つの重要な課題になると私は考えます。言い換えると、カウンセリングにおける「不易流行」――変わらぬものと変わりゆくもの――を見極めるということになるでしょうか。

私自身は、カール・ロジャーズ、友田不二男、ユージン・ジェンドリンを心の師と仰いでおり、この人たちに出会うことがなければ、自分はカウンセリングの道に入ることはなかっただろうと思っています。その意味では、私は来談者中心療法への一元的な志向を強くもっています。これまで『ロジャーズ主要著作集』の共訳に携わり、『友田不二男研究』の分担執筆を担当し、そして今年ジェンドリンの『プロセスモデル』の日本語訳を上梓したことは、自分の最も根幹のところで取り組んできた仕事であると自負しています。

しかしその一方で、私は英国で刊行された『心理臨床への多元的アプローチ』の監訳に携わり、最近設立された日本心理療法統合学会では多元的アプローチに関するシンポジストを務めたりもしています。多元的アプローチとは、人間にとって本質的に重要な問題には唯一の解答や真理があるのではなく、さまざまな解明のあり方があるとする多元論の哲学に基づくアプローチのことで、近年、カウンセリングのみならず、政治学や社会政策、ソーシャルサービスの分野などでも注目されているものです。現在、細かく分けると 400 を超える流派ないしアプローチがあると言われるカウンセリング／心理療法の分野において、それらをどのように自分の学びや実践にとり入れたらよいのかは重要かつ困難な問題です。数多くの流派やアプローチをすべて吸収するのは容易なことではないでしょう。しかしだからといって、新たな知見を学ぼうとしないカウンセラーの姿勢がカウンセリング実践にとってマイナス要因になるとしたら、それはそれで大きな問題だと言わざるを得ません。こうしたことを鑑みると、カウンセリングのこれからにとって、多元的な志向はもはやとどめることのできない動向であると言えます。

とすると、ここで問題になるのは、カウンセリングの世界において一元的志向と多元的志向をどのように両立させることができるのか、ということだと思います。

従来の折衷的アプローチや統合的アプローチなどと、この多元的アプローチの違いは、多元的アプローチでは自らが軸としてきたアプローチを放棄したり、価値下げしたりする必要がないという点です。例えば、多元論的な政治学や国際関係論の観点では、私たちが他国・他地域や異文化の特質を理解し、国際協調をはかろうとするときに、日本人であることや日本の文化を捨て去る必要はなく、むしろそれらを深く掘り下げ理解することによって、より他国・他地域や異文化への理解も深まる、と考えます。カウンセリングでも同様の観点をもつことが可能でしょう。つまり、自分にとって軸となる理論や方法を深く掘り下げながら、同時に他の理論や方法も尊重し、自らのウィングを広げていくというところに多元的アプローチの特質があると言えるでしょう。

多元的な志向の中に一元的な志向を保つこと、また、一元的な志向の中に多元的な志向を保つこと、禅では「一即多」という言い方がなされたりしますが、一元的なものと多元的なものの両立はこのように可能なのではないかと私は考えています。

・ユニバーサリティとローカリティ：最後に、ユニバーサリティとローカリティということについて考えてみたいと思います。いわゆる一般性・普遍性と、地域性・個別性の関係の問題です。

カウンセリングの理論やアプローチは、その多くが欧米を発祥としており、森田療法や内観療法といったわずかな例を除いては、主に欧米から輸入された理論と方法が日本においても活用されています。来談者中心療法もその主要な例に漏れず、その意味ではロジャーズはカウンセリングを欧米にも日本にも、そして世界に広げたユニバーサルな動向の先導者であったと言えるでしょう。

もう少し細かく見てみますと、私は、フロイトの精神分析はユダヤ的な文化や思想の背景を色濃く内包していたと思いますし、ロジャーズより以前にカウンセリングを発展させたウィリアムソンは米国的な民主主義を重視する、今で言うところのグローバリズム的な価値観をベースにしていたのではないか、という印象を持っています。これらに対して、ロジャーズの来談者中心療法は、世界中の人々に向けられたユニバーサルな特質を持つ、初めてのカウンセリングのアプローチだったと言えるでしょう。また、ジェンドリンはユダヤ系ですが、ロジャーズよりもさらに、東洋思想や仏教的なものとも、そしておそらくは世界各地の辺縁に根付くアニミズム的な文化などとも親和性を持った方法や哲学を展開してきました。

ここに一つの問いが浮かびます。それでは、カウンセリングの理論や実践は文化や民族などを超えた世界共通のものであって然るべきだろうか？ というものです。

私の中でロジャーズやジェンドリンとともに、友田不二男氏の存在が意味をもつのはこの点においてです。友田先生は私たちに、ローカリティを忘れないことの大切さを伝え続け、個性的なものの中にこそ普遍性があるという、ユニバーサリティとローカリティの関係についてのユニークなとらえ方を重視されていました。欧米発祥の理論や方法であっても、日本においてカウンセリングを実践する際には、当然ですが、日本の社会や文化の中で日本語を使って行うのが常です。とすると、私たちが日本でカウンセリングをどのように実践し発展させていくのかということには、私たちが生きている状況や文化や言語などにどのように向き合い、それらを大切にしているのか、ということが重要な問題になるはずです。

最近、日本の教育界が力を入れている低学年の子どもたちへの英語教育が、ひょっとしたら日本語の消滅に結びついてしまうのではないかとの警鐘を鳴らす書籍が出版され、話題になっているようです。当たり前のように存在していた大切なものが、いつの間にか消えてしまい、無くなってしまう。それはとても不幸なことですし、そうならないように不断の努力を怠ってはならないと思います。ただ、少し見方を変えますと、日本語はこれまでに漢字

をはじめとしてさまざまな他言語との相互作用において形成され発展してきたものだとも言えます。言語だけでなく、食文化やファッション、住環境なども和式の様式が他文化と触れ合い、相互作用することで洗練されている例は、私たちの生活のあらゆるところに見出すことができます。

日本におけるカウンセリングもそのようなユニバーサリティとローカリティの間で磨き続けられ、洗練されてきた一つの実例だと言うことができるでしょう。そしてローカリティの観点は、私たちが日常を生活している地域コミュニティの枠組みでもとらえることができます。愛知カウンセリング協会は、この愛知の地においてこそ発展してきたユニークな団体であり活動だったのではないでしょうか。そのような意味で、愛知カウンセリング協会の活動は、日本のカウンセリングの洗練や発展の一端を担ってきた独特な軌跡としてとらえることができますし、カウンセリングの未来へとつながる独自の歴史と成果を遺されてきたのだと私は確信しています。

元禄期の俳書『花見車』には、芭蕉没後、俳諧にいそしむ人々の間には、誰が生み出したものかは知らぬまま蕉風の付け合いが広まっていった、と書かれているそうです。

私たちにとって大切なもの、いわゆる本物はこのようにして世に遺るのだ、ということを教えてくれるエピソードだと思います。愛知カウンセリング協会の中で磨かれてきたカウンセリングの実践と精神が、この愛知の地を中心にしてこれからも末永く遺り続けていかれることを心より願い、私の話題提供の締めとさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

文　献

愛知カウンセリング協会編（2023）『愛知カウンセリング協会 60 年の歩み～こころを聴く～愛知カウンセリング協会が遺したもの』NPO 法人愛知カウンセリング協会

クーパー、M.　清水幹夫・末武康弘監訳（2012）『エビデンスにもとづくカウンセリング効果の研究』岩崎学術出版社

クーパー、M.　&　マクレオッド、J.　末武康弘・清水幹夫監訳（2015）『心理臨床における多元的アプローチ』岩崎学術出版社

ジェンドリン、E.　T.　村里忠之・末武康弘・得丸智子訳（2023）『プロセスモデル―暗在性の哲学』みすず書房

日本カウンセリング・センター編（2009）『友田不二男研究』財団法人日本カウンセリング・センター

ロジャーズ、C. R.　末武康弘・保坂亨・諸富祥彦訳（2005）『ロジャーズ主要著作集 1~3』岩崎学術出版社

末武康弘（2020）公認心理師時代の今、あらためてブライアンズ・ヴァキュームに学ぶ『カウンセリング研究』26，2-11